

集

俳句フォーラム

2020年4月 第75号

白山句会

菊日和

平野無石

日の丸の頬飛び上るノースайд
日の軒は猫の天国冬館
菊日和みんなとげ抜く寺の街
試食する姥のぬか漬け菊日和
菊まつり江戸にはじまる寺縁起

冬ぬくし

都築繁子

落葉つむテニスコートの静もれり
坂道の鉄の手すりや冬木立
我が街の平和記念像冬ぬくし
華やげる景色車窓のクリスマス
人の世のやさしさにふれ年暮るる

終着駅

植木やす子

六地蔵懸崖の菊足下に
菊まつり佇み命長らへて
托鉢の尼僧にこやか菊まつり
寒空や新幹線の終着駅
屋上庭園棘のみ残す冬の薔薇

立冬

田中藤穂

見上げ立つ菊人形の手力たじ男か命お
「憚り」と書かれてありし菊の寺
木の家のどこかがきしみ冬に入る
植木屋と昔の話菊日和
立冬や独り暮らしの味噌を買う

有楽町

篠田純子

真知子巻めきしまフラー有楽町
寒風裡ベンチに憩うサラリーマン
枝振りの颯々の桜冬ざるる
天岩戸を担ぎ力むや菊人形
人声に一旦止まる昼の虫

家族のかたち

大山夏子

七五三祝う家族のかたちさまさまに
菊薫る地蔵の眼笠の内
坂登り詰めさまさまの紅葉かな
爪切ってもらおう勤労感謝の日
友人の平癒を祈る冬青空





指人形

渡辺節子

茉莉花や激戦レイテの墓碑的
隠れキリシタンおりしや島の秋深く
雪女一人二役指人形
被災地の無人駅なりみぞれ降る
蔵之介役はわが友義士の日の

返事

大山夏子

木瓜の実の存在感を卓の上
青きまま落ちる木瓜の実空也の忌
空耳と解って返事夜の寒し
暮早し一ト日で仕事終わらずに
風邪薬かたわらに置き般若湯

冬の坂

中川のぼる

破れ蓮抗うことの為し難し
胸中の右に割れたる柘榴かな
法空を是として寝入る冬の夜
冬の水万事休すも欺かず
事もなく過去は歩みし冬の坂

人生模様

江口九星

柿熟す我がもの顔の鳥の群れ
てらてら熟柿や空は青さまし
秋の夜の空理空論酒交え
冬菊は人生模様赤白黄
烏瓜の際立つ赤さ崖なかば

産土神事

伊藤昌枝

碑に刻まる座右の銘や木の実落つ
隠れ里空堀はみな落葉埋む
潮寄せる音を聞きつつ浮寝鳥
郷遠き叔母縫いくれしちゃんちゃんこ
小松菜の産土神事二の酉に

年用意

吉宇田麻衣

思い込み詰め込みがちな年用意
子の熱に師走の思考停止する
芋煮かな山の空気もご馳走に
世界一めざす死闘の秋歓喜
心はずむ銀杏料理の祝い膳

ジユラ紀

楠本和弘

赤とんぼ始発電車に乗り込んで
秋時雨うつつけの意地の蘭奢待
黄落や地獄の門を敲きおり
銀杏黄葉降る回廊のジユラ紀かな
憂き事もごった煮のなか年忘れ

賜る

渡部恭子

子守する小春の時空賜りて
空なるや右脳くすぐる猫じゃらし
右左逆反抗期いわし雲
蜜柑山丸ごと光り香り立つ
起き上り小法師ぐらり冬日を纏いつつ

余韻

小沢えみ子

ポケットに仕舞う想い出秋の果
幼子のつむじが二つ七五三
真青なる空久しぶり蒲団干す
新聞の記事を切り抜き年惜しむ
渾身の第九の余韻星冴ゆる

エレジー

酒井たかお

台風禍ただ黙々と人動く
大根引く畝まだ遠し腰伸ばす
小春日の沐浴赤子あくびして
銀杏落葉巻きあぐらと黄に染まる
流るるは子らのエレジー虎落笛



円の会

柿落葉

石川東児

駿河湾の海溝青し冬日かな
雲に入り雲を出でけり雁琴柱
達磨の忌大拙記念館壁白し
鴟一声ヒマラヤ杉の穂先揺れ
柿落葉今年の捨て句省みる

帰り花

大山夏子

小鳥来る色街動き出す午後三時
鳥渡る日々一枚の皿を拭く
台風過信濃の林檎無事なるや
葱一本買い足し戻る独りの餉
長き塀の途中顔出す帰り花

寡黙

日置游魚

第三世界喋り過ぎたる冬の鴟
枯蠟螂過去は私の負える罪
着ぶくれて老人というカテゴリー
短日や聖歌優しき子守唄
冬日燦寡黙な男を構いたる

大銀杏

重原爽美

大木の銀杏散り敷く嵩を成す
水底に水面に散りし銀杏かな
草々の初霜被る道細し
草々の真白に被る霜の径
初冬や晴れて曇って雨風に

秋蝶

仁上博恵

自転車の置かれて久し秋日和
刈り込みを待ちかねていた小鳥来る
秋蝶の付き来る墓参歩をゆるめ
ビル灯や冬の夜陰を許さざる
十二月時間の束の流れ行く

秋出水

小笠原妙子

地球瓶の堅き煎餅秋没日
掛稲や胸の奥まで日の香り
秋出水壁に残れる水の嵩
秋暁や蓮池の空七色に
漱石忌圓朝落語を聴いてをり

凍鶴

三羽永治

錆鮎や下る流れに身をまかせ
年重ね来て夕暮の花八手
君と我ひとつ音して枯葉踏み
凍鶴の動かざる黙風の中
梢火ほかほか山荘に満つ匂ひかな

湯気の間こつ

治部少輔

寺町の松をながむるうそ寒し
秋夕日鳶が迎える帰帆かな
家移りの煩わしさや秋の風
塗り替えの足場外して小春かな
湯気立てる鍋ほどよき友と酒を酌む

たましいの声

三柵 敦

たましいの聲がみちびくゆりかもめ
骨柄のきりりと見せて櫛枯る
ぶらんこの空眠くなる眠くなる
冬至富士空に秀でる艶の肌
母の方肩抱いている夢沈丁花

結び目

中山未奈藻

幼子を抱きしむ教皇冬木の芽
氷川丸秋のさざ波寄せ返す
芭蕉義仲墓碑を濡らせし秋時雨
弓張月芸妓二人の帰り道
結び目のひとつがほぐれ虫の声